

謙信祈誓文

戦国の乱世に越後が生んだ武将、上杉謙信は、宿敵・甲斐の武田信玄とともに余にも有名だ。この両雄は、その雌雄を決するため五回にわたって川中島（長野県）で対決したが、黒白はつかず、天下制覇の夢は露と消えた悲運の武将でもあった。

その謙信が、戦いを前に弥彦神社に参拝、出兵の理由と、その道理を明らかにし、武運と神の加護を祈った“願文”を奉納している。「上杉輝虎祈誓文」である。

この祈誓文は「輝虎（謙信）筋目を守り非分を致さざる事」の書き出しで始まり五カ条から成っている。その内容は

- 一、 関東へ毎年兵を動かして鎮撫に努めるのは、上杉憲政から関東管領職を譲与されたため、正義の軍である。
- 一、 信濃国へ出動する訳は、第一には小笠原、村上、高梨、須田、井上、島津そのほか信濃の諸豪（族）が、武田信玄にその所領を奪われたため、落ちのびて自分を頼りにして来たからだ。第二にはわが所領である上野国西部へ信玄が手向かって来た。第三には、川中島でわが将士が多数討たれた。このような正統な理由により、信玄征伐の行動をするのであって、これまた自分に非道はない。

などとなっており、最後に「永禄七年（一五六四）六月二十四日 上杉輝虎」と記名している。

永禄七年というと、五回目の川中島合戦の年にあたる。川中島で合戦の火ぶたが切られたのは、この年からさかのぼること十一年前の天文二十二年（一五五三）。謙信二十四歳、信玄三十三歳の時である。享禄三年（一五三〇）、越後守護代・長尾為景の子として生まれた謙信は、天文十七年（一五四八）に十九歳の若さで家督を継いで春日山城主となり、翌々年には越後国主に。そして関東管領になるのは、信玄との合戦が始まった後の永禄四年（一五六一）で、この時に上杉氏の名跡を継いで長尾の姓が変わっている。

一方、謙信より九つ年上の信玄も、大永元年（一五二一）、甲斐の守護・武田信虎の長男として出生。二十一歳で父信虎を今川義元のもとへ追放して実権を握り、小国・甲斐の勢力拡大のため、着々と隣国の信濃国に手を伸ばしていた。

群雄割拠の戦国時代にあって、両軍が全国最強を誇っていたといわれる。ともに厳しい自然環境の中で鍛え抜かれた両軍の精鋭が、長野県を流れる千曲川と犀川の合流地点にあたる川中島で激突するのである。そして五回にわたる対決の中でも、最も壮絶な戦いと後世に伝えられているのが、永禄四年（一五六一）八月の四回目の戦いであった。この戦いだけで双方の戦死者は六千人といわれる。川中島はるるいたる死体と血で染まり、謙信と信玄の大將同士による一騎打ちも展開されている。

だが、過去四回にわたる戦いでも勝負はつかず、謙信が弥彦神社に必勝祈願して出陣した五回目の対決でも、両軍はただにらみ合っただけで引き返している。そして信玄は天下を掌中に入れようと、上京途中の天正元年（一五七三）四月に五十三歳で、また謙信もそれから五年後の天正六年（一五七八）三月、四十九歳で、それぞれ波乱に富んだ生涯に終止符を打つ。